

言語哲学の「自然化」と生成文法
ーチョムスキーとクワインの自然主義の比較を通してー

慶應義塾大学 鈴木陽登

序論

20 世紀後半から急速に進行しつつあるクワイン流の自然化は、言語哲学における探求のあり方にも大きな影響を与えた。特に 1980 年代以降、「意味や真理や指示といった「大きな」概念の解明が直接目指されるのではなく、哲学者がいくつかの例でしか取り扱っていない言語現象をより組織的に調査し、そこから「小さめの」理論的提案をするというスタイルの研究が、言語学の中で出始めるとともに、言語哲学者もまた、同様のスタイルの小ぶりの主題を取り上げた専門論文を発表するようになった。」(飯田 2007, p. 651)。言語哲学の自然化という潮流の中でもとりわけ注目になるのは、言語哲学と生成文法の接近である。言語学者のチョムスキーによって創始された生成文法は、「言語に対する自然主義的アプローチ」としてしばしば特徴づけられるため、自然化を志向する言語哲学者たちが生成文法に注目するのは自然な発想であるかもしれない。実際、自然言語を形式文法を用いて定式化しようとした初期生成文法の試みは言語哲学者の興味を引き、両者は特に形式意味論を接点として交流を持つようになった (飯田 2022, pp. 240-5)。

しかし、両者の交流は言語分析におけるテクニカルな道具立て(例えば、可能世界意味論)に関するレベルにとどまり、リサーチプログラムのレベルで両者の統合が進展したとは言い難い。パーティーが述べるように「心理学の一分野としての言語学というチョムスキーの見解と、〔形式意味論が依拠する〕反心理主義的なフレーゲの伝統との明らかな不整合によって生じる基礎的な問題は、明確に解決されることはなかった」(Partee 2018, p. 173)。両者の不整合から生じる問題として、チョムスキー的伝統の下では意味とは話者に内在する言語能力の一部であると考えられている一方、フレーゲの伝統の下では意味は話者の心から独立した抽象的・公共の対象であると考えられているという、意味の存在論的身分についての見解の不一致などが挙げられる。理論言語学におけるこのようなリサーチプログラム間の不整合を、ジャッケンドフは次のように述べている。

主流の言語理論は、内的に整合するものではありません。典型的な言語学の大学院生は、音韻論を最適性理論 (Prince & Smolensky, 2004)、統語論を極小主義プログラム (Chomsky, 1995)、意味論を可能世界における真理条件 (Heim & Kratzer, 1998) から学ぶ。これら 3 つの理論のいずれも、他の 2 つの理論とは実体的なつながりがない[...]果たしてこれが正しい言語理論なのだろうか。私にはこれは猫の頭とラクダの胴体と七面鳥の脚を持つ獣のように見える。(Jackendoff 2015, p. 189)

さらに両者のリサーチプログラムの整合性をめぐるより根本的な問題として、言語哲学の「自然化」が依拠するクワイン的哲学観と、生成文法が前提とするチョムスキーの自然主義観との整合性が明らかでないという点があげられる。後述するが、少なくとも表面上では実際に両者の緊張関係がみられるため、チョムスキーとクワインの自然主義を比較し、あらためてその整合性を検討する必要がある。この作業に取り組むことで、例えば「自然化された」言語哲学と生成文法が共有できる基盤が存在するのかという問いや、両者に緊張関係があるとして、その緊張関係はどこから生じるのかといった問いに示唆を与えることができるだろう。結論から述べると、本稿では「自

然化された」言語哲学およびそれが依拠するクワインの自然主義の基本的な見解をチョムスキーの自然主義観は共有しており、両者の対立が生じるのはクワインの自然主義の基本的な見解にどのようなオプションを付加するかという点であるということを論じる。

本稿の構成を述べる。1 節ではクワインの自然主義既定の内実を確認する。2 節ではチョムスキーの自然主義観と、それが依拠する「ガリレオ的スタイル」の探求手法について概観する。3 節ではチョムスキーによるクワインの自然主義に対する批判を紹介する。4 節では両者の自然主義を比較し、少なくとも基本的な部分では整合的であるということを主張する。

1. クワインの自然主義

この節の目的はクワインの自然主義既定を明らかにすることである。本稿では井頭（2010, 2017）に沿ってクワインの自然主義を確認する。まず井頭は、クワインによる自然主義を「基礎づけ主義の拒否」という見解と「体系内在主義」という立場のセットとして整理する。以下では、これら 2 つの主張の内容と根拠を紹介する。

①基礎づけ主義の拒否（井頭 2010, pp. 28–42）

基礎づけ主義は、例えばデカルトの方法論的懐疑における議論のように、信念を正当化するためには、科学に先行する「絶対確実な基礎」を哲学的に与える必要があるという立場である。クワインが主に念頭に置いている基礎づけ主義的プロジェクトは、主にヒュームからカルナップに至る経験論的な伝統に基づくものであるが、これは「絶対確実な基礎」は確固たる感覚経験であるとする立場である。

しかしながら、クワインの診断によれば、この種の基礎づけ主義は放棄される。経験論的基礎づけ主義の到達点であるカルナップの構想においては、翻訳的還元、すなわち外界についての言明を、感覚与件・論理学・集合論のみを用いる要素命題へ翻訳することが目指された。しかし、クワインによる全体論のテーゼによれば、世界についての個々の言明はそれ自体で固有の経験的意味を持たず、経験的意味を持つのは言明のネットワーク全体である。したがって、世界についての言明を個別的に要素命題へと翻訳することは不可能である。このように、クワインは自身の全体論のテーゼに基づいて経験論的基礎づけ主義（翻訳的還元のプロジェクト）を拒否する。

②体系内在主義（井頭 2010, pp. 37–41; 2017, pp. 191–3）

クワインは、我々の信念の正当化について、それを「我々の信念体系から独立した外界との対応」という實在論的基準から行うことはできないとする。このような診断を受け入れた場合、「我々の認識が外界との対応を期待できないのであれば、我々の信念体系を正当化することが困難である」という懐疑論と、「外界との対応という概念が機能不全に陥ったのであれば、代替として、信念の正当化は、我々の既存の信念体系内部から提示される基準から行う必要がある」という体系内在主義という 2 つの選択肢がありうる。井頭によれば、クワインは真理・實在概念のデフレ化、すなわち何が真理／實在であるかは我々の最良の理論において判断されるという立場を受け入れることによって、懐疑論を拒絶し、体系内在主義を採用する。

井頭によると、クワインはこれらの基本的見解を受け入れたうえで、最終的に以下のような自然主義規定を提案する。

自然主義：仮説演繹法以上の正当化手続きの存在を拒否し、「哲学が科学

に先行してそれを基礎づける」という第一哲学的構想を退ける立場（井頭 2010, p. 72）

ここで注目すべきは、このような自然主義規定——井頭はこれを「最小限の自然主義」と呼ぶ（井頭 2010, p. 82）——には、極端な自然科学主義や物理主義のような特定の立場への直接的なコミットメントは見られないということである¹。クワインの自然主義規定がこれらの立場を含意しないということは、クワイン自身の以下の記述からもわかる。

私は是非とも、物理学や宇宙論の最も先進的な研究も、実験心理学、歴史学、社会科学と同様に科学それ自体に含めたい。また、応用される限りにおいての数学さえも〔科学に含めたい〕。というのも、数学は自然科学に不可欠だからだ。[...]デカルトの心身二元論は形而上学と呼ばれるが、それは偽であったとしても科学としてみなせるかもしれない。[...]もし私が、可能なセンスデータ (sensibilia)、可能者 (possibilia)、魂、創造主を想定することに間接的な説明上の利点を見出すのなら、喜んでそれらに科学的地位を与えるだろう。それは、クォークやブラックホールのような公然たる科学的措定物と同等である。では、「先行する哲学」の名の下に何を禁じたのか？[...]私が参照した自然主義の特徴づけにおける要点は、実在の目録と記述を裏付けるにあたって我々が合理的に追求できる最高のものは、由緒ある仮説演繹法における観察可能な帰結の検証可能性だということにすぎない。(Quine 1995, pp. 275-276)

自然主義は当然、物理主義や唯物論と関連している。私のデカルト的二元論に関する先の所見が示すように、私はそれらを同一視しない。私は物理主義を科学的立場として受け入れているが、将来の科学的根拠に基づいて物理主義を放棄することはあっても、自然主義を放棄することはないだろう。[...]明らかに私の自然主義は、世界についての真理の追求において、我々の伝統的な科学的手続きである仮説演繹法に勝るものはないという主張に要約される。(Quine 1995, p. 281)

いくつかの箇所では、Ebbs は私の「科学」という用語を狭く解釈しているように思われる。私たちには *Wissenschaft* のような広い意味を持つ語はないが、私が念頭に置いているのはそれである。歴史学は物理学や数学と同様、私の自然主義に馴染むものである。(Quine 2016 [1995], p. 34)

ここでクワインは、「科学」という概念を自然科学に限定されない広い意味で用いており、また、魂や創造主など一見すると「非科学的」な存在者であっても、説明上有用であれば科学的地位を与えるという柔軟な態度をとっている。さらにクワイン自身、自然主義と物理主義が必ずしも同一の立場ではないという見解を示している。したがって、物理主義や自然科学主義といった立場はクワインの「最小限の自然主義」から自動的に導出できるものではなく、「最小限の自然主義」に付加する立場として（有力ではあるかもしれないが）採用可能な選択肢の一つに過ぎないと考えられる。そこで井頭は「〈最小限の自然主義〉というベースにさまざまなオプションを付け加えることで多様な自然主義的な立場を生み出すことができる」という自然主義の基本構図を提示する（井頭 2010, p. 93）。

さらに、「（最小限の自然主義という）コアな規定とそのオプション」という自然主義の構図は「自然主義という立場そのもの」と「一自然主義者としてのクワイン」の区別を可能とする（井頭 2010, pp. 86-7）。すなわち、一

自然主義者としてのクワイン——広く認知されているような、物理主義的・行動主義的自然主義者としてのクワイン——の立場は、彼が提出した「最小限の自然主義」（＝「自然主義という立場そのもの」）に物理主義・行動主義というオプションを追加したものとして描出することができるのである。

2. チョムスキーの自然主義

この節では、チョムスキーの自然主義の内実を明らかにすることを目的とする。まずは彼が自然主義について言及している箇所を確認する。

心に対する「自然主義的アプローチ」は、世界の心的な側面を他のあらゆる側面と同じように探究することで理解可能（intelligible）な説明理論を構築することを、やがて起きる「中核的な」自然科学との統合への希望を抱きつつ追求するものである。（Chomsky 2000, p. 76）

このように、ヒトの言語能力のような「心的現象」も、自然界における物理的現象や化学的現象などの諸現象を研究するときと全く同じ方法で研究すべきという立場は「方法論的自然主義」（Methodological Naturalism）と呼ばれる。チョムスキーの自然主義はあくまで方法論上の立場であるため、自然に何が存在するか、自然はどのように組織化されているかなどについての存在論上のコミットメントは含まれない（cf. Collins 2008, p. 16）。

また、この立場と対置されるのが「方法論的二元論」（Methodological Dualism）と呼ばれる立場である。それによると、心や言語などの研究には、物理学や生物学などの他の自然科学の分野とは異なり、アприオリな方法論的制約——提出される言語理論は我々の常識的な言語概念を反映していなければならないなど——が存在する。チョムスキーは、このような方法論的二元論は、言語の自然主義的探究において有害な立場であるとして棄却する。すなわち、物理学などにおいて提出される「反直観的」な諸原理は、我々の常識に反するという点のみから棄却されることはない一方で、言語や心の探究において提出される理論は我々の常識を反映しなければならないと要請するのはダブルスタンダードである（Chomsky 1995, p. 7）。

以上がチョムスキーの自然主義の概観であるが、ここでとりわけ疑問となるのが「他のあらゆる側面と同じように」心的側面を探究するとは、具体的にどのように探究することなのかという点である。本稿ではさしあたり、この疑問に対しては、チョムスキーが「ガリレオ的スタイル」（Galilean Style）²と呼ぶ手法によって探究することであるとする。チョムスキーは「ガリレオ的スタイル」について以下のように述べている。

おそらくきわめて大規模な理想化を行い、感覚によって捉えられる世界以上の意義を与えられる抽象的モデルを構築する心構えを持ち[...]説明不可能な反例さえも存在することを容認する心構えを持つことによって、われわれは表面上の理解を越えた地点に達しうると考えてよいであろうか。（Chomsky 1980, pp. 9-10=1984, p. 14）³

ここで「ガリレオ的スタイル」とは、大まかには（ある程度の反例の存在を許容する形で）理想化を伴うモデル構築の作業であると理解することができる。

チョムスキーによれば「ガリレオ的スタイル」は自然科学で一般的に採用されている探求手法であり、それはある種のモジュール性を有するヒトの認知システムなど、「その振舞いが、多様で複雑な条件下で動作する多数の内部

システムの相互作用によって決定される、と正当に信じられる有機体を研究する場合」にも適用可能である。(Chomsky 1980, p. 218)

アロットらは、チョムスキーの「ガリレオ的スタイル」に含まれる中心的主張を以下のように整理している (Allott et al. 2021, p.158)。

- (i) 基盤となる説明構造の探究としての科学概念
- (ii) 表面的な一般化とより深い説明原理の区別
- (iii) 理論はデータを網羅する必要はなく、データは理論の妥当性を判定するために

用いられる。

まず(i)の点について、アロットらは、われわれが得ることができる表面的なデータは、根底にある様々な基礎的システムの相互作用によってもたらされるものであり、「単一の理論でカバーするにはあまりにも複雑である」と指摘する。たとえば言語学者が実際の談話を記述する際、そのような談話の中に含まれる、言い間違いや言い淀み、発話の中断などの様々なノイズを一旦捨象するのは、そのようなノイズの要因となる諸システムを全て含むような単一の理論を構築するのが（少なくとも現時点では）望めないためである。したがって、現象の根底にある説明構造にアクセスするためには、現象を構成する諸システムを切り分け、高度に理想化した形で切り離して研究しなければならない。例えば生成文法における言語能力 (competence) と言語運用 (performance) の区別 (Chomsky 1965) はそのような理想化の典型である。

次に(ii)の点について、アロットらによれば、チョムスキーは観察データの一般化と説明原理を区別したうえで、理想化の目的は前者ではなく後者に至ることであると主張している。データの一般化は、より深い説明理論が何を説明すべきかについて明確にする点においてのみ有用であり、一般的な事実のすべてが説明的であるというわけではない。

最後に(iii)の点について、アロットらは、フォーダーの「科学で起こっていることは、われわれの経験に適合する理論を持つとすることではなく、われわれは自分たちの理論を裁定 (adjudicate) するための経験を持つとすることが近い」という見解 (Fodor 1991, pp. 202–3) を適切であると評価している。「ガリレオ的スタイル」の探求の下では、言語学者は単に観察された全てのデータに適合する理論を作ろうとするのではなく、競合する理論の妥当性に関する判断を下す上で重要なデータを探そうとする。

以上でチョムスキーの自然主義とそれが依拠する「ガリレオ的スタイル」の内容を確認した。まずチョムスキーが構想する自然主義は方法論的自然主義であり、その内実は「ガリレオ的スタイル」と呼ばれる探求手法によって特徴づけられる。そして「ガリレオ的スタイル」の探究の目的は、単に多くの現象・データを網羅することではなく、現象の背後にある基礎的システムに関する説明理論を構築することであり、その手段として、ある程度の反例を許容する形で高度な理想化を行う必要がある。

3. チョムスキーによるクワイン批判

1 節と 2 節では、クワインとチョムスキーの自然主義の内実について確認した。しかし、両者の自然主義は、一般的には相容れないものであると考えられている (Chomsky 1994, 2000; Collins 2008 など)。まずチョムスキーは、クワインの「自然化された認識論」が、行動主義心理学に基づくものとして批判する。

現代の認識論的自然主義は、ウィラード・クワインの「自然化された認識論」に由来するものである。それは、知識および信念の研究は、いかなる科学的意義も持たないと知られている行動主義心理学の狭い一分野に組み込まれなければならないと規定したもので、それ自体奇妙な動向であったにもかかわらず、驚くほど反論を引き起こすことはなかった。

(Chomsky 2000, p. 80)

ここでチョムスキーが行動主義を「いかなる科学的意義も持たない」と批判するのは、彼の理解によれば、行動主義は行為や発話の集合といった観察可能なデータの研究に専心する一方で、それらの行為や発話を生み出す（直接観察不可能ではあるが真に科学的に理解すべき）内的なメカニズムについては沈黙を貫いていたためである(cf. Chomsky 1986, Chap. 2 = 2012, 3章)。

さらにチョムスキーは自身の方法論的自然主義を明確化する際に、クワインをはじめとする多くの自然主義者が与する、物理主義などの形而上学的(存在論的)自然主義に対しても批判を加えている。

物理主義はいくつかの問題に直面しているようだ[...]「物的対象(physical/material)」の概念には明確な意味がない[...]物理主義や形而上学的自然主義には整合的な教義がなく、消去主義の問題も心身問題もないように思われる。(Chomsky 1994, pp. 195-6)

チョムスキーによる物理主義(や形而上学的自然主義)に対する批判は、物理主義が前提とする「物的対象」という概念には明確な内容が存在しないという点に集約される⁴。すなわち、物理主義が前提とする「物的対象」なるもののクラスは、そこに含まれる実体や性質が具体的に何であるのかを明確化できないため無内容であるⁱⁱⁱ。仮に「物的対象」のクラスを我々の日常的概念や常識にのみ訴えて明確化するのであれば、それは、日常的・前理論的な常識や直観に特権的な地位を与える方法論的二元論に陥ることになり、チョムスキーが掲げる方法論的自然主義に違反してしまう。また、「物的対象」のクラスを、経験的な方法(例えば物理学の理論などに訴えるなど)によって規定しようとするのであれば、「物的対象」という概念の内容は現行の物理学における可謬的な理論に依存することになる。そして物理学の理論が将来にわたる改訂可能性に開かれている以上、現時点で「物的対象」なるものの固定的な意味を確定することは不可能である。

4. 両者の比較

3節で紹介したチョムスキーによるクワイン的自然主義に対する批判において、チョムスキーは物理主義・行動主義といった立場にコミットしている(ように見える)クワインの立場に批判を加えている。しかし1節で確認したように「自然主義という立場そのもの」にはそのような立場へのコミットメントはないため、この批判がクワインの自然主義それ自体に向けられているのであれば、妥当ではないと考えられる。それでは、クワインとチョムスキーの自然主義には共有可能な基盤は存在するのだろうか。以下ではこの点を明らかにするにあたって、チョムスキーの自然主義がクワインの「最小限の自然主義」に含まれる見解を共有しているかを確認する。1節で確認したように「最小限の自然主義」は、①「哲学が科学に先行してそれを基礎づける」という第一哲学的構想を拒否し、②仮説演繹法以上の正当化手続きの存在を拒否するという2つの見解からなる。

まず①の見解をチョムスキーが共有しているかを確認する。第一に、方法

論的自然主義に基づく言語研究は、科学に先行して措定されるアプリオリな基準（日常的な直観との合致など）によって正当化されるのではない。また、チョムスキーは、哲学者がなすべきことは近代科学の知識を高次の観点から正当化することではなく、科学的知識を所与としたうえで近代科学が提供する概念を明確化することであるという見解を受け入れている（Chomsky 1995, p. 7 = 2012, p. 296）。以上の考察により、チョムスキーもまた、方法論的自然主義においては、独自の方法論で科学の基礎付けを与える哲学としての「第一哲学」は存在しないという①の見解を共有していると考えられる（cf. Chomsky 2000, pp.76-7）

次に②の見解について、まず仮説演繹法とは、当該仮説から予測を演繹し、それが観察事実と合致するか否かで当該仮説の正しさを判定するという手続きである。井頭によれば、仮説演繹法による経験的テストは反証の手続きであり、仮説の正しさや確からしさは「仮説に合致する観察事実の量」に必ずしも従属しているわけではない。すなわち、どれほど理論が導出する予測が観察事実と合致していようと、そのことが直ちに仮説の正しさや確からしさを保証するわけではない。したがって仮説演繹法によるテストにパスするために「成功する予測を次々と生み出してその仮説群の確証度をあげていく必要はない」（井頭 2010, p. 73）。これはアロットらが提示した「理論は必ずしもすべてのデータを網羅する必要はなく、データは単に理論を裁定するために用いられる」という「ガリレオ的スタイル」の研究方針と合致すると思われる。

以上の議論をまとめると次のようになる。まずチョムスキーによる、認識論的自然主義や、物理主義などに代表される形而上学的自然主義に対する批判は、「一自然主義者としてのクワイン」に対する批判にはなっているが、クワインが提出した「自然主義という立場そのもの」に対する批判としては成功していない。そして、クワインの自然主義規定に含まれる「基礎づけ主義の放棄」および「仮説演繹法以上の正当化の存在の拒否」といった基本的見解は、「ガリレオ的スタイル」に基づく方法論的自然主義においても共有されていると考えられる。したがって、クワインとチョムスキーの自然主義は少なくとも基本的な部分では整合的であると結論付けられるだろう。

では両者の対立はどこから生じたのだろうか。本稿では「コアな規定とそのオプション」という自然主義の構図に基づき、両者は何をオプションとして採用するかについて対立していると主張する。すなわち、チョムスキーが与する生成文法は方法論的自然主義をコアな規定として、心的実在物としての言語という見解や生得性仮説をオプションとして採用しているのに対して、クワインは「最小限の自然主義」をコアな規定として、物理主義や行動主義といった立場をオプションとして採用している。同様の診断は生成文法と「自然化された」言語哲学についても当てはまる。すなわち、「自然化された」言語哲学はある種のクワイン的哲学観——ここではそれは「最小限の自然主義」と仮定する——をコアな規定とする一方で、抽象的・公共的対象としての言語観という、生成文法とは異なるオプションを採用していると理解できる。

5. 結論

本稿における議論を振り返る。本稿では、「自然化された」言語哲学と生成文法が共有可能な基盤は存在するのか、両者に緊張関係が存在するとしてそれはどの点から生じるのか、という問題を取り上げ、これに対し「自然化された」言語哲学が依拠するクワイン的自然主義とチョムスキーの自然主義を比較検討することで応答した。

まず1節では、クワインの自然主義は「基礎づけ主義の拒否」「仮説演繹法以上の正当化手続きの拒否」の見解からなるということを確認した。また、物理主義・行動主義にコミットしているクワインは「一自然主義者としてのクワイン」として理解され、彼の立場はクワインのコアな自然主義規定にオプションが加わったものとして説明されるのであった。2節では、チョムスキーの自然主義は「ガリレオ的スタイル」に基づく方法論的自然主義であるということを確認した。そこでは、我々がアクセス可能な現象の背後にある基礎的システムについての理論的理解を目的とされ、データはそのような基礎的システムに関する理論を裁定するために用いられる。3節でチョムスキーによるクワインの自然主義に対する批判を紹介したうえで、4節ではチョムスキーの批判は「自然主義という立場そのもの」の批判にはなっていないと論じた。また、両者の自然主義は少なくとも基本的な部分では整合的であり、両者の対立はオプションとしてどのような立場を採用するかという場面で生じると主張した。

しかし、本稿で示したことは、あくまで「自然化された」言語哲学と生成文法が最低限共有可能な基盤が存在するというに過ぎず、このことから直ちに両者がリサーチプログラムとしての統合に至ることができると主張するのは困難である。両者がリサーチプログラムとして統合可能であると論じるためには、両者のオプションレベルでの対立の内実やその調停可能性をさらに詳しく検討する必要がある。

注釈

1 これまで極端な自然科学主義・物理主義・還元主義の代表格と目されてきたクワインの自然主義をより穏健な立場として解釈しなおそうとする試みは他にも存在する。例えば、Verhaegh (2017) や Ebbs (2022) などを参照せよ。

2 「ガリレオ的スタイル」という用語は Weinberg (1976) に由来する。

3 引用ページ数は、訳書が存在する場合（原著=訳書）の形式で記述する。

4 チョムスキーによる物理主義批判と、それに対する応答については、Poland (2003) を参照せよ。

文献表

Allott, N., Lohndal, T., & Rey, G. (2021). "Chomsky's "Galilean" explanatory style." In N. Allott, T. Lohndal, & G. Rey (Eds.), *A companion to Chomsky* (pp. 517–528). Wiley-Blackwell.

Chomsky, N. (1965). *Aspects of the theory of syntax*. M.I.T. Press.

Chomsky, N. (1980). *Rules and representations*. Columbia University Press. (井上和子・神尾昭雄・西山佑司訳 (1984) 『ことばと認識』。大修館書店。)

Chomsky, N. (1986). *Knowledge of language: Its nature, origin, and use*. Praeger Publishers. (福井直樹 編訳 (2012). 「言語の知識」, 『チョムスキー 言語基礎論集』, 岩波書店。)

Chomsky, N. (1994). "Naturalism and dualism in the study of language and mind." *International Journal of Philosophical Studies*, 2(2), 181–209.

Chomsky, N. (1995). "Language and nature." *Mind*, 104(413), 1–61. (福井直樹 編訳 (2012). 「言語と自然」, 『チョムスキー 言語基礎論集』, 岩波書店。)

Chomsky, N. (2000). *New horizons in the study of language and mind*. Cambridge University Press.

- Collins, J. (2008). *Chomsky: A guide for the perplexed* (1st ed.). Bloomsbury Publishing.
- Ebbs, G. (2022). "Quine's naturalism: Neither "reductive" nor "liberal"." In M. De Caro & D. Macarthur (Eds.), *The Routledge handbook of liberal naturalism* (pp. 97–109). Routledge.
- Fodor, J. A. (1991). "The dogma that didn't bark (a fragment of a naturalized epistemology)." *Mind*, 100(2), 201–220.
- Jackendoff, R. (2015). "In Defense of Theory." *Cognitive Science*, 1–28.
- Partee, B. H. (2018). "Changing notions of linguistic competence in the history of formal semantics." In D. Ball & B. Rabern (Eds.), *The science of meaning: Essays on the metatheory of natural language semantics* (pp. 191–208). Oxford University Press.
- Poland, J. (2003). "Chomsky's challenge to physicalism." In L. M. Antony & N. Hornstein (Eds.), *Chomsky and his critics* (pp. 29–48). Wiley-Blackwell.
- Quine, W. V. O. (1995). "Naturalism; or, living within one's means." In R. F. Gibson (Ed.), *Quintessence: Basic readings from the philosophy of W. V. Quine* (pp. 275–286). Harvard University Press.
- Quine, W. V. O. ([1995]/2016). "Response to Gary Ebbs." In F. Janssen-Lauret & G. Kemp (Eds.), *Quine and his place in history* (pp. 33–36). Palgrave Macmillan.
- Verhaegh, S. (2017). "Quine on the nature of naturalism." *Southern Journal of Philosophy*, 55(1), 96–115.
- Weinberg, S. (1976). "The forces of nature." *Bulletin of the American Academy of Arts and Sciences*, 29(4), 13–29.
- 飯田隆. (2007). 「クワインとクワイン以降/分析哲学 2」. 飯田隆 (編). 『哲学の歴史 11』. 中央公論新社, 608–670.
- 飯田隆. (2022). 『増補改訂版 言語哲学大全 I』. 勁草書房.
- 井頭昌彦. (2010). 『多元論的自然主義の可能性』. 新曜社.
- 井頭昌彦. (2017). 「哲学的自然主義の内と外」. 『現代思想』, 45(21), 青土社, 186–206.